

高市

巻頭鼎談

総務大臣

早苗

西本安博

奈良県安堵町町長

川井徳子

ノブレスグループ代表

奈良県安堵町に 地域の経済構造改革の 先進事例を訪ねて

構成●編集部 写真●河野利彦
写真提供●安堵町、うぶすなの郷TOMIMOTO
今、地方が自ら資金循環を起し、
自身の力で活性化することが求められている。
そのため総務省では、集約とネットワークによる
地域全体の経済性向上を図る
「地域の経済構造改革」に取り組んでいる。
先進事例を視察した高市大臣に同行した。



富本恵吉の居室を客室とした「日新」の縁側で日本庭園を眺める高市大臣(右)、西本町長(左)、川井代表(中)。

Yasuhiro Nishimoto

1947年奈良県安堵町生まれ。
立命館大学法学部卒。奈良市役所で交通政策課長、
財務部参事、企画部理事、観光経済部長などを歴任。
株式会社都祁総合開発代表取締役、安堵町教育委員会委員を経て、
2010年8月に安堵町長就任。14年8月に再選(2期目)。

Noriko Kawai

1958年奈良市生まれ。立命館大学(西洋史専攻)卒。
97年に父親が経営していた運送会社を引き継ぎ、現在は不動産業、
観光業、IT・デザインなど6つの会社を束ねるノブレスグループの代表。
著書に「不動産は「物語力」で再生する」(東洋経済新報社)。

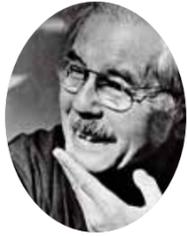
総務省では、地域の資源と資金を活用して、雇用の吸収力の大きい地域密着型企業を全国各地で立ち上げる「ローカルTOMIMOTOプロジェクト」を推進している。

奈良県安堵町は同プロジェクトによって、伝統家屋を宿泊施設および地元食を活かしたレストランの「うぶすなの郷TOMIMOTO」に改装した。さらに、伝統工芸である灯芯を活用した和キヤンドルなどの新商品の企画販売を開始した。

この事業は、まさに地域資源を活用した先進的で持続可能な事業であり、他の同様な公共的な地域課題を抱える地方公共団体に対する高い新規性とモデル性が認められたわけである。

今回、「地域力の創造、地方の再生」という地域経済好循環推進プロジェクトを牽引する高市早苗総務大臣と、このプロジェクトの実現に尽力した西本安博安堵町長、川井徳子氏との鼎談が、改装成った同施設で実現した。

数多い採択事業のなかでも特徴的な取り組みの経緯や今後の展望を直接語っていたことで、取り組みを検討している地域にとって、有益な参考事例となることだろう。



富本憲吉 (1886—1963)
陶芸家。
色絵磁器に金銀彩を加えた華やかな作風を大成。人間国宝。



今村荒男 (1887—1967)
内科学者。元大阪大学第5代総長。
結核予防と治療に尽力した。
勤三の四男



今村勤三 (1851—1924)
明治・大正の実業家・政治家。
奈良県の再設置運動に私財を投じた。
文吾の甥



今村文吾 (1808—1864)
幕末の医師・儒学者。
大和国添下郡安堵村の家は、
代々大和中等寺の侍医を務めた



Sanae Takaichi
1961年生まれ。神戸大学経営学部卒。
93年衆議院議員に初当選。現在、7期目(奈良2区)。
2006年、第1次安倍内閣で内閣府特命担当大臣に就任し、初入閣。
自民党政調会長を経て、14年第2次安倍改造内閣で
総務大臣に就任。第3次安倍内閣・第3次安倍改造内閣・
第3次安倍第2次改造内閣でも再任。

**安堵町は富本憲吉を始め
多くの偉人を輩出**

まず、安堵町を知るために、この町の文化、歴史などについてご紹介したいだけだと思います。

西本 安堵町は、奈良盆地の北西部に位置する町で、南には大和川が流れる美しい田園風景が広がり、一方、西名阪自動車道沿いには「大和まほろばスマートインターチェンジ」の開発により企業立地が進んでいます。

世界遺産である法隆寺が近くにあり、町内にはかつて聖徳太子(厩戸皇子)が斑鳩宮と飛鳥を行き来したとされる古道「太子道」が通っており、今もその名残を残しています。

一方、町の南に大和川、西に富雄川、中央を岡崎川が流れ、難波の津と飛鳥を結ぶ水運の要衝として、豊かな歴史・文化が古より集積している地です。

この地からは、多くの偉大な人物が輩出されたと聞いていますが。

西本 その通りです。中でも特に輝かしい功績を残した人物を出した家として「今村家」があります。幕末、京都で医学と儒学を学び柳生藩や中宮寺の侍医を務め、自宅に「晩翠堂」という塾を開いて多くの人材を輩出した今村文吾は、江戸時代末期に起こった「天

誅組の変」に志士として加わった国学者の伴林光平とも深い交流があったことでも知られています。その変では多くの門下生がかかりました。

次に、明治から大正時代、奈良県が堺県に、次いで大阪府に編入された後、奈良県を独立・再設置に導いた功績に

**外部から人を呼び込む
だけでなく地域の人
が幸せを感じる事が大切**
——高市

よって初代の県議会議長を務めた今村勤三は、文吾の甥にあたります。のち、大隈重信の改進黨で衆議院議員として活躍し、政界引退後は、明治時代の産業の発展にも大きく貢献し、奈良鉄道、初瀬鉄道、四国・讃岐鉄道、養徳新聞社、奈良県農工銀行、郡山紡績(合併

地域活性の視点から、地域の資源と資金を活用して地域金融機関と連携した民間活力・ノウハウによる成長戦略が不可欠である今、国・町の補助金を活用しながら、民間の資金とノウハウで「うぶすなの郷TOMIMOTO」に生まれ変わったことは、安堵町にと



安堵町は面積4.31km²、人口約7,500人。
町の南には大和川が流れ、田園風景が広がる。

って大きな飛躍と大変喜んでいきます。

**そこで生活することの
楽しさの醸成が必要**

このたび、高市総務大臣はこのプロジェクトの視察に訪れたわけですが、ご感想をお聞かせください。

され後の大日本紡績)など、当時の近代化にかかるさまざまな会社を設立し、実業家としても活躍しました。

そして、明治から昭和にかけて医学者として大成し、活躍したのが、勤三の四男・今村荒男です。大阪帝国大学(現大阪大学)第5代総長で、同校を総合大学に発展させ、結核感染症を専門に研究し、現在の奈良県立医科大学の初代校長や大阪府立成人病センターの初代所長などの要職を歴任しました。「BCG接種」を初めて採用し、レントゲン車による集団検診を考案するなど、わが国の予防医学の基盤を打ち立てた荒男は文化功労者として、日本の近代産業・医学・薬学の発展に大きな功績を残しました。

今回、お話をうかがう場所になった「うぶすなの郷TOMIMOTO」の元々の主であった陶芸界の巨匠・富本憲吉とは、どのような人物だったのでしょうか。

西本 明治から昭和にかけて陶芸家として名を成し、東京美術学校の教授、京都市立美術大学教授を務め、初の人間国宝で、のちに文化勲章を受章、気品にあふれる数々の色絵磁器を作り出しました。

彼は生まれ育ったふるさとを、うぶ

すな(産土)と呼び、安堵の風景や自然は、彼の作る陶芸作品のモチーフ(図案)として用いられました。そして、先にお話した今村荒男とは旧制郡山中学校でのクラスメイト、一生涯の友人でした。

富本記念館の誕生と閉館に至った理由、そして、このたびの新たなプロジェクトを起こした経緯をお聞かせください。

西本 富本憲吉と同郷で「富本憲吉記念館」の創設者である辻本勇は、富本に心酔し、1974年(昭和49)に私財を投じて記念館を開館し、同館の運営や富本作品の研究に邁進、陶芸作品はもとより、デザイン類の収集にも力を注ぎました。しかし、創設者の没後、2012年(平成24)に、惜しまれながら閉館となりました。

郷土の誇りである富本憲吉の生涯を何とか新しい形で後世に繋いでいきたいというのが私たちの願いでした。そこで、大和の旧家の文化的価値の高い木造家屋や、かつての環濠住宅であった濠の風景を残しながら、法隆寺、太子道を核とした広域観光の拠点として再生したいという狙いで総務省の「ローカル1000プロジェクト」に応募することにしました。